

まえがき

この本は書名に示す通り、「考える歴史の授業」の実践報告集です。今でも日本の歴史授業の定番は教師の一方的な教え込み（チョーク&トーク）の授業です。それは生徒（児童）にとっては教師からの説明をひたすら理解し暗記することを強いられる授業です。「考える歴史の授業」は、そのような授業のアンチテーゼとして生み出されました。つまり、生徒が主体的に歴史を考え、調べ、話しあい活動や討論など意見交流をし、各自がそれぞれに自分の歴史認識を発達させ、歴史を科学的に探究する姿勢や意欲、能力を獲得していく授業です。

先駆的には、山本典人の実践（小学生が歴史上の人物、たとえば旧石器時代の野尻湖人や平安時代の藤原道長などになりきって時代を体感する）や安井俊夫の実践（中学生がさまざまな時代や地域の民衆に共感して歴史を自分事として考える）などが存在していましたが、1990年代に加藤公明が、それらの実践や宮原武夫の歴史教育論（『歴史の認識と授業』岩崎書店、1981年）に学びながら、高校生が真剣に歴史を考えて討論する「考える日本史授業」を実践して歴史教育者協議会の大会や機関誌『歴史地理教育』誌上に発表していききました（『考える日本史授業1～4』地歴社、1991年、1995年、2007年、2015年）。そうして作り出されはじめた「考える歴史の授業」ですが、やがて榎澤和夫や若杉温などの千葉県歴教協日本史部会のメンバーもそれぞれに教材を開発し、授業構成を工夫するなどして独自の「考える歴史の授業」を実践し、その成果を発表していききました（『絵画史料を読む 日本史の授業』国土社、1993年。榎澤『絵画・写真・地図を使って討論を』日本書籍、2000年。若杉『歴博で高校生が見つけた歴史の授業のヒント』歴史民俗博物館振興会、2006年）。

むろん、生徒を主体とする歴史の授業はさまざまな地域で多くの教師によって実践されてきました。その1つ1つが個性的で魅力的です。歴教協の大会や『歴史地理教育』を通じて、お互いに学びあいながら実践を改良し、授業力を高めてきたといえます。しかし、大会では分科会別に報告がなされるために別の分科会に参加しては報告を聞くことができません。『歴史地理教育』に掲載される実践報告の本数には限りがあり、与えられるページも十分とは言えません。そこで、えりすぐりの「考える歴史の授業」に十分なページを割いて授業者自身に実践報告を書いてもらい、「考える歴史の授業」を学びあう機会を広げたいと考えました。そして、多くの方々に「考える歴史の授業」の魅力や必要性、可能性を知ってもらい、「考える歴史の授業」の実践者を1人でも増やしたい。それが、この本を出版しようとした私たちの願いです。

2019年7月

加藤公明・榎澤和夫・若杉 温